

明治期における「良妻賢母」論と
国家主義的女子教育思想の形成と展開

——中村正直「善良なる母」（1875年）から
下田歌子『婦人常識の養成』（1910年）まで——
（要旨）

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：D146252
氏名：郭 妍琦

本論文は、「良妻賢母」思想の創始者としてしばしば取り上げられる中村正直の啓蒙主義と、「良妻賢母」主義を明確に言説化した一人である下田歌子の国家主義的「良妻賢母」思想及び女子教育観の変容と展開を、主として彼ら自身の著作に基づいて検討した。

中村はイギリスに留学して、同国が発展したのは人民の「勤勉忍耐」と「自主の志向」のためであり、そのような徳はキリスト教の信仰から生まれると認識した。また、イギリスの母親たちの知識や識見の高いことを目の当たりにしたことから、日本でも女子教育に力を入れる必要性を痛感した。その後彼が女子教育の国家への貢献を重視するようになるのは、留学中に当時の国際状況を知り、近代化の遅れが国際競争での敗北につながるという危機感を抱いたことが大きかった。女性の国家貢献という発想は幕末に普及していた儒教的色彩の濃い「女範」に既に現れていたが、危機的状況において国家を浮揚させようという発想は、近代日本の未来を国際社会の中で考えたものであり、儒教的な「女範」等とは異質の近代的なものである。このように、中村の女子教育は西洋的「開明」を目指して始められ、彼の「良妻賢母」論は女性の国家貢献の側面が重視された。

中村の「良妻賢母」思想は「良妻」思想と「賢母」思想から成った。彼の作った「良妻」像は政治に参与する男性が、内助とする同時に家庭における後顧の憂いがないように求める理想としての面が強調されていた。夫を補佐することで国家に貢献するという妻の役割には、西洋の影響よりも、近世日本に浸透していた「女範」との共通性が強い。しかし、中村の説く「親愛の情ある婦人」では、核家族内部の役割が強調される一方で、「孝」という徳目—特に舅姑の介護—が要求されていないこと、また愛情によって結ばれた夫婦関係が主張されたことが、近世までの「良妻」の伝統と異なるといえる。

次に「賢母」について中村は、子供が母親の胎内にいる時の胎教と、生後の育児における啓蒙教育とを分けて論じた。中村は、女性が教育を受け、それによって「賢母」の役割を果たすことを期待した。その一方で彼は育児に関して男性の役割には触れておらず、ことさら女性の道徳的・宗教的側面からの貢献にのみ言及した。中村がキリスト教を重視したのは、「西国は教法を以て精神と」すると認識し、それが国家富強の重要な要因であると考えたからであった。

このような思想に基づき、中村は実際に女子教育に力を入れた。しかし教育の現場において中村は、道徳・宗教（修身及び敬神）と学問・芸術（技芸及び学術）という「二種教育」を提唱していたが、彼が実際に行った教育では技術や実学の要素が少なかった。これは中村が、自分が提唱した理念と異なり、女性に実務的知識を求めなかったことを意味している。また中村は、「男女同権」や女性の参政に関する科目を勉強させていたにもかかわらず、彼は女性の役割を家事に限定し、政治は男性に任せるべきであると主張した。すなわち彼の主張する「男女同権」とは、教育を受ける権利においてのみ平等であったことがわかる。

中村は女子に相応しい職として幼稚園教師を提唱したが、それはあくまで子供の日常的な世話をする保母であり、子供に知識を与える専門家ではなかった。このように、中村は男女の役割分担においては、「男は外、女は内」という伝統的・儒教的思想を超えていなかった。彼の「良妻賢母」思想とは、つまり、女性に対して子供と夫のために尽くすことを通じて、究極的に国家のために役割を果たすことを要求するものであった。最終的な目標は、日本が西洋のような文明的で強大な国に追いつくことであった。そのため中村は、子供の世俗的成功と結びつくように母親が「剛強、勇果、勤勉、忍耐」の諸徳を身につけ

るべきであると主張した。その成功例として挙げられているのは、ナポレオンなど西洋の偉人であった。中村は個人が社会的地位や名声を得ることを成功と捉え、そのような文脈で母親の役割を議論している。

近代啓蒙家、および帝国六大教育家の一人に数えられた中村が提唱した「賢母」の思想は、西洋的色彩—特にキリスト教要素—が濃いものであり、それは国際社会の中で日本が近代化し強国と伍していくことを目標とした新しいものであった。これはその後の日本の女子教育に重要な位置に占めた「良妻賢母」思想の起源であり、近代女子教育の基盤の一つを構築した意義は否定できない。

さて、下田の女子教育論を貫いたものは、「良妻賢母」思想であった。桃夭学校の校名にも、夫の家に貢献する「良妻」の像がおぼろげに見えていたが、1892年に出版した『にはのをしへ』において下田は、「節婦」として妻の役割は、舅姑に仕え、夫を補佐することであり、それによって自分の家を富裕にし、ひいては国の富強に貢献することであると述べ、「良妻」のイメージを明確にした。「賢母」の役割については、1884年の華族女学校の開校式において、政治家や軍人を育てることと主張した。1891年の『にはのをしへ』では、「賢母」はさらに国の富強と開明のために努めることとされた。このように、華族女学校で教えた時期より、下田は、女子教育の目的を国家に貢献することと捉えていた。1893年からは、女性は家政によって国家に貢献すべきであると主張し、家政を「良妻賢母」の義務とした。

さらに1893-1895年に欧米留学を果たした後の下田は、女性は母として子女養育に務め、妻として舅姑に仕え、家政を行うといった家庭内の役割を果たすことを主張した。このようにこの時期の下田の「良妻賢母」は、家庭内の役割を通じて間接的に国家に貢献することが目指されていた。さらに彼女は、「良妻賢母」となるのは「中流」家庭以上の女性であり、「中下流」の大衆女性はむしろ家計のために職業に就くべきであると述べ、「階層的な女性観」を展開した。しかしながら、下田は「下流」家庭の女子の状況は十分理解できなかったため、彼女の「大衆女子教育」は発想通りに実行できなかった。

1910年の著作『婦人常識の養成』において、下田は「國民教育」を主張した。この時点では、「良妻賢母」になる前提は、「完全なる国民」と「立派な人格」を持つことであるとされた。即ち、下田は、「良妻賢母」は自己犠牲を厭わぬ「國民」として国家に直接に貢献すべきであると考えようになった。このようにして下田の「良妻賢母」およびそれに基づく女子教育は、彼女の考える国家像と結びついて、いっそう国家主義的に展開したことが確かめられた。

このような下田の「良妻賢母」思想と女子教育は、中村正直のそれと比較すると、国家に貢献する女性を育成するという視点から形成され、それに基づく女子教育論を提起した点において共通している。二人ともイギリス留学経験を持ち、イギリス女性の高い知識水準を目の当たりにして、母親による家庭教育の重要性を認識した。さらに、二人とも留学中に当時の国際状況を知り、近代化への乗り遅れが国際競争での敗北につながるという危機感を抱いた。二人はそのような危機感から、帰国後は女子教育の重要性を認識した。また、二人とも「良妻賢母」思想を提唱するのみならず、実際に女学校を創設して、実際に自身の思想を女子教育に導入しようと試み、さらに体系的な女子教育の制度作りに向けて努力した。これらの点はいずれも、明治教育家として、国内外の状況を認識しつつ日本の近代化を促進する必要性から生じたといえよう。

2人の相違点に着目すると、中村は主に「賢母」と国家の富強と結びつけたのに対し、下田は「良妻」の家政上の役割と次世代国民を育成する「賢母」の役割が共に日本の発展に重要であると論じた。中村は国家という語を用いることはなく、それほど国家論を展開

しなかったのに対して、下田は頻繁に自らの近代国家・国民国家観を展開した。中村の女子教育論には欧米文明への憧憬が強く見られたが、下田には「東洋女徳の美」をもって西洋の「皮相の文明」に抵抗するといった、欧米への対抗意識が顕著となった。これは明治啓蒙主義からの大きな変化と言える。中村がキリスト教的な道徳と宗教の重要性を指摘したのに対し、下田は欧米文化をモデルとすることを拒否し、日本固有の道徳を強調した。日本の「良妻賢母」論は、中村の言説に見られた明治啓蒙主義的なものから、下田の言説を重要な起点として、自己犠牲の精神と日本の独自の文化や政治体制を強調する国家主義的なものへと大きく展開・変容した。

このように、日本における初期の「良妻賢母」思想及び女子教育は、西洋から迫る危機に抵抗しながら、日本の近代国家・国民国家の形成を促進するという内外の社会状況と密接に関連しながら変容・展開した。中村も下田も全ての女性に国家への貢献を求めたが、下田の言説を詳細に分析すると、彼女は異なる階層の女性に異なる役割を求める「階層的な女性観」を主張していたことが確かめられた。明治、大正、昭和初頭にわたって強い影響力を持つ教育家であった下田が展開した「良妻賢母」論は、その後の日本の女子教育に重要な位置を占めた。それが女子の教育機会を拡大し、女性の社会進出を促進した意義は否定できないが、女性の自由な活動範囲を家庭に制限し、女性の自主性を抑制し、国家の利益を第一とすることによって男性中心の社会を擁護する働きを持ち、女性解放のためにならない。このような展開に至った大きな要因として、本論で論じたように、彼女の「良妻賢母」論および女子教育が非常に国家中心主義的であったことが指摘できよう。